

## 遺歌集二冊 谷岡亜紀

今月から一年間、時評を担当する。「心の花」の時評は、入会以来四十年間でたぶん五、六度めだと思うが、特にこの数年、時評の書きにくい時代だと痛感している。そこで今回は、一つの指針として、短歌の置かれた「いま」の手触りを主に歌集を中心にして探りたい。いうまでもなく、歌人の最終的な評価を決定するのは歌集である。

二〇一七年一月三日に岩田正さんが亡くなった。その遺歌集が『柿生坂』である。同歌集には晩年七年ほどの作品を収録する。

- ・乙女らはどつと笑へりこんなにも明るき世かと涙にじめり
  - ・いくたびか人と別れし曲り角老いて人なきいまもふりむく
  - ・まあだだよ言はれつづけてもういいと老いてはじめて言はれた気がする
  - ・おさらひのつもりで妻にさよならと言へばにはかに悲しみ溢る
- 生への洞察に溢れた人間通の歌であり、岩田が正真正銘、窪田空穂を継ぐ一人であることを知らされる。『柿生坂』には「列車にてくるまにて見る景よりも眼凝らし老いてみる景ふかし」という歌集冒頭の歌さながらの世界が展開する。引用したい歌が限りなくある。
- ・笑顔いつもむける老女ころみなうしなひ善意のみのこりたる
  - ・センチター長の朝のあいさつ重々と今日のお昼の献立つぐる
  - ・センチターの入口のむかう空の下世間と言へりわれのふるさと
- こうしたケアセンチターの歌にも胸に沁みるものがある。人間を丸ごと肯定するユーモアに、聖性と言うべきものが寄り添う。いいなあ。

・われにとりて死とはあしたのレタスの葉夕への狭山茶失ふことか  
 ・眠つても眠つてもまだ眠りたいああ死とはこの眠りにあらぬ  
 ・背なに呼ぶ不安なる妻のこゑのして魔の棲む森の奥に入りぬ  
 死への思惟と予感が歌われる。ことに三首目には、こちら側の世界を背に、すでに死の混沌に足を踏み入れたかのような凄みがある。

早稲田大学、窪田空穂・章一郎、「まひる野」を通じて岩田正さんと繋がる橋本喜典さんが、つい先日、四月八日に亡くなった。  
 ・病むことに支へられつつ生きて来しつよくはかなき実感のあり  
 ・ステッキなど持ちてよろよろゆくれかあひるベンギン従へながら  
 ・祝福は祈るころのかなたにて届かねばいのる心を捨てず  
 ・胸を張りたつたつたと気持ちよく遠ざかりたるわれいまいづこ  
 ・米とぎてとぎたる汁を土にやり石にもかけて祈ることあり

現時点での最終歌集『聖木立』より引いた。諦観というか、時にユーモアを交えながら、この世の存在、この世に生きて死ぬ運命を静かに、深く見すえ「人生の達人」という言葉を思わせる。技巧も、方法も、イムズも、計らいは全て消え、心の簡素な輪郭だけが残る。それはひとつの〈祈り〉である。その姿勢は歌集中の〈物象のひとつひとつをこのやうに慈しみ見しことのあるしや〉〈青葉影踏みてステッキに佇むわれはこの刻々の生をかなしむ〉〈上手だなあと思ひつつ読みてゐる歌集上手であること〉にやがて倦みつつといった歌に知ることができる。

- ・転落死の人に添ひぬし盲導犬いづこにいかにか引き取られしや
- ・夏草に隠れてをりし石五つ静かに白き冬の日を受く
- ・緑児よ米寿のわれはおのづから八十八年後の人類思ふ

岩田正九十三歳、橋本喜典九十歳。当然ながら、新しさや流行や若手歌人の話題だけが、短歌の〈現在〉なのではない。